

# 博士学位論文審査要旨

2011年6月20日

論文題目： 一休派の結衆と史的展開の研究

学位申請者： 矢内 一磨

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 竹居 明男

副査： 同志社大学 名誉教授 武藤 直

副査： 京都府立大学 教授 上田 純一

要 旨：

本論文は、中世史家黒田俊雄による権門体制論ならびに顕密体制論に基づく歴史研究の視角を、寺院史に収斂させて検討を進める際の諸課題についての提起を承けて、一休宗純（1394～1481）とその門派を構成した僧衆・俗人や彼らの活動（すなわち「結衆」）を対象とした、著者積年の史料分析の成果を、中世日本の社会生活史の諸局面の反映として把握し、体系的に考察したものである。

本論は大きく2部からなる。まず第一部「評議と祖師忌法会にみる一休派の結衆とその史的展開」では、一休による印可と法嗣の否定が、法統断絶の危機を招いたため、一休没後に、彼の塔所酬恩庵（現京田辺市薪所在）で行なわれた評議（衆議）が門派結衆の軸になったことを指摘し、また大徳寺真珠庵や酬恩庵において祖師忌法会が行なわれた過程を、近世に至るまで綿密にたどっている。

具体的には、第1章で、「真珠庵文書」「酬恩庵文書」を素材に、祖師塔である酬恩庵の慈揚塔に結衆して展開した評議体制の16世紀前半から17世紀半ばすぎに至る展開を明らかにした。つづいて第2章から第5章にわたって、主として大徳寺真珠庵で執行された明応2年（1493）の祖師十三回忌、永正7年（1510）の三十三回忌、天正8年（1580）の百回忌、さらには延宝8年（1680）の二百回忌及び享保15年（1730）の二百五十回忌の各大法会を対象に、残された記録類を綿密に解読・検討して、それぞれの運営体制・収支状況、及び一休派の結衆形態を分析し、真珠庵が一休派の寺庵というよりは、大本山大徳寺の塔頭としての性格を次第に強めて行くことを明らかにしている。

つづく第二部「一休派における僧俗の結衆とその史的展開」では、僧俗の結衆に論点を進め、一休派教団が広く社会と接点を持った様相を歴史的に跡づける。具体的には、第1章で、応仁・文明の乱で荒廃した大徳寺の復興が、一休の遺志を継承した一休派によって、堺の豪商や戦国大名などに働きかけて成し遂げられたこと、中でも連歌師柴屋軒宗長の勧進活動が特筆に値することを述べ、第2章では、戦国～江戸初期における葬祭や授名を通じての在俗信仰者 - とりわけ若狭・近江の武家など - の結衆状況などを明らかにし、第3章では尼ならびに女性信者の結衆形態にも筆を及ぼしている。さらに第4章では「泉南仏国」の語義・由来とその実態を論じ、中世都市堺で教線を拡大した禅・念仏・法華などの宗教的世界の中での一休派の位置づけを試みた。

祖師忌法会の収支状況の解釈、一休派の意義ないし性格の規定、さらには一休の貴種性の問題など、なお一層の検討を要する点もあるが、既発表論文に多くの新稿を加え、かつ膨大な史料の綿密な分析・検討をふまえた本論文が、未刊史料を公刊・紹介した付論も含め、従来の研究では空白に近かった一休派の歴史的研究と意義づけに関して、基礎的かつ本格的な考察を遂げたことは何よりも大きな成果である。よって本論文は博士(文化史学)(同志社大学)の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

## 学力確認結果の要旨

2011年6月20日

論文題目： 一休派の結衆と史的展開の研究

学位申請者： 矢内 一磨

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 竹居 明男

副査： 同志社大学 名誉教授 武藤 直

副査： 京都府立大学 教授 上田 純一

要 旨：

上記の審査委員3名は、2011年5月28日午後3時から、徳照館2階共同利用室において、学位申請者に対し約3時間にわたって学力確認を行なった。まず口頭試問では、提出論文への詳細かつ多岐にわたる質問が行なわれたが、いずれに対しても的確かつ明快な応答が得られ、さらに申請者は日本中世の禅宗史・宗教史だけではなく、広く社会史・文化史についても広範な学識を有していることが立証された。また引き続き行なわれた語学試験（英語）においても十分な語学力を備えていることが確認された。よって、学力ならびに語学力は、十分なものであると認める。

# 博士学位論文要旨

論文題目： 一休派の結衆と史的展開の研究

氏名： 矢内一磨

## 要旨：

日本文化史において寺院史が占める位置は大きく、諸寺院に関して多様な研究が蓄積されている。20世紀後半、黒田俊雄は中世国家の一翼を担った寺社勢力を研究し顕密体制を提示した。黒田による中世寺院史研究は人物史・宗派史・教義研究などを中心にした従来の教団史の枠組みを越えたものであり、多くの研究者に影響を与えた。黒田は中世寺院史研究会を組織し、中世社会生活史の視角から寺院を題材に歴史研究を行う立場を提唱した。複数の研究者が黒田の提唱した寺院史研究の視角に拠って、研究を進めて新たな知見を学界にもたらした。

黒田は「中世寺院史と社会生活史」で、中世寺院研究の個別研究蓄積の重要性を述べるとともに、寺院史研究の特徴的な主題として①修学②衆議③法会④僧坊⑤世俗⑥葬送⑦聖をあげている。そして黒田自身、仏教の教義そのものに基づく本来教義上の概念であるが、それらを社会生活史の概念にまで高める必要性を強調した。その課題設定は寺院史研究のうえで現在においても有効性をもち、課題設定に基づいて個別研究蓄積が続けられている。

以上の中世寺院史研究に関する到達点と課題設定を踏まえて、本論文では一休宗純(1394~1481)の系統にある僧衆・俗人によって構成された、一休派という社会集団を研究対象に考察をすすめる。室町時代の禅僧一休について研究蓄積が数多くあるが、一休派についての研究は1例に留まる。そのため一休没後の一休派に関しては、日本文化史研究史上において空白となっている。

本論文では黒田が提唱する寺院史研究の特徴的な主題である前述の①~⑦を論点とすると同時に、一休派が存続するために必要であった「結衆」についても各々の主題を取りあげるうえで、横断的な論点とする。上記の課題設定は、中世社会生活史の視角から寺院を題材に歴史研究を行うという黒田の研究視角から導き出されたものである。以上を踏まえた本論文の目的は一休派の結衆と史的展開を具体的に明らかにすることで、中世末期から近世にかけての寺院史研究史上の空白を埋め、今後の一休・一休派を研究する場合の基本文献として学界に提示することである。

本論文は大きく二部で構成する。第1部は一休が印可と法嗣を否定したため法統の断絶の危機を招き、一休没後に一休の塔所での評議(衆議)が門派結衆の軸になったことを指摘するとともに、門派で祖師忌(法会)が執り行われた過程を研究する。第2部では、大徳寺復興や在俗信仰者の結衆の問題を修学・僧坊・世俗・葬送・聖をもとに研究する。

第1部は「評議と祖師忌にみる一休派の結衆」をテーマとする。

第1章では一休派における評議体制の成立と展開について述べている。一休宗純自身が没後の法嗣を否定したために、僧団の四散の危機に瀕した僧衆たちが、祖師塔である酬恩庵の慈揚塔に結衆して一休派の存続を維持した過程を「真珠庵文書」と「酬恩庵文書」によって明らかにした。本論文が明らかにした中世末から近世前期における慈揚塔の評議体制と史的展開は、従来の一休研究や大徳寺派研究では全くの盲点であり、新たな発見である。

第2章では真珠庵で明応2年(1493)に執行された祖師十三回忌大法会について述べた。祖師十三回忌大法会は開庵間もない真珠庵で、一休派の他庵の僧衆も深く関与して営まれたことを述べた。同じく真珠庵で永正7年(1510)に執行された祖師三十三回忌大法会についても考察をし、開創19年後の真珠庵が独自に大法会の経営をなしえるまでに成長を遂げていたことを史料の検討から具体的に確認した。一休派の祖師十三・三十三回忌大法会の具体的な分析は、本論文が初めてである。

第3章では、で天正8年(1580)に真珠庵において執行された祖師百回忌大法会について、史料をも

とに法会の経営と法会の結衆者の構成についてに分析をした。この時の大法会は、真珠庵独自の執行体制によっておこなわれて、一休派教団全体の行事として性格が弱まったものと判断される。つまりこの段階には、真珠庵が一休派教団の寺庵という側面よりは、大本山大徳寺の塔頭としての側面を強めていたことが注目される。

第4章では、真珠庵で延宝8年(1680)に執行された祖師二百回忌大法会と享保15年(1730)に執行された祖師二百五十回忌大法会について考察した。第2・3章でとりあげた中世の祖師忌大法会とは異なり大徳寺山内との連携を一層深め、一休派教団全体の行事としての印象はさらに希薄になっている状況を当該史料から把握した。

第5章では、近世の酬恩庵の史料をもとに、一休宗純の祖師塔たる慈楊塔で毎年行われた祖師忌法会を検討した。寛永年間(1624~44)から宝暦年間(1751~64)の祖師忌法会の執行、経営形態を、酬恩庵文書をもとに分析した。その結果、近世後期の酬恩庵の祖師忌法会は南山城の地域社会によって支えられていたことを明らかにした。近世酬恩庵の祖師忌関係文書を用いて、研究を行ったものは、本論文が初めてである。近世酬恩庵の研究に裨益すること、大である。

第1部付論では五山禅林と禅僧の結衆との関連を述べる。一休派教団は林下禅の系統に属するが、官立の五山禅林にあってもさまざまな場において僧衆の結衆がある。ここでは南北朝時代の禅林の詩会に着眼して、禅僧の結衆が生み出した文化として評価される堺海会寺蔵乾峯土曇自筆序『牡丹花詩集』をとりあげた。五山文学は日本文化史上のひとつの精華として評価されるが、その背景に禅僧の結衆が欠かせない要素であった。本論文は孤本である『牡丹花詩集』の位置づけを、初めて行った。

第2部は、「一休派における僧俗の結衆とその史的展開」をテーマとする。

第1章では、文明6年(1474)に当時齢80歳余りの一休が、応仁文明の乱で荒廃した大徳寺の復興の命を帯びて大徳寺住持に就き、その目的のため教団を結衆して任に当たったことを述べた。本来、大徳寺の主流派ではなかった一休派は堺の豪商、戦国大名などに働きかけて、この大事業を成就しているが、なかでも連歌師・柴屋軒宗長はひときわ目立つ勲進活動を果たしたことを強調しておく。宗長の勲進聖的側面を指摘したことが、本論文の新解釈である。

第2章では、寺庵を拠点にした葬祭、授名の主題に沿って在俗信仰者の結衆について論述した。諸宗において葬祭は在俗信仰者を教団に結衆させるための重要な契機であり、これは一休派においても同様であった。酬恩庵で慶長9年(1604)4月16日に執行された、前豊後守春苑宗栄居士の葬祭の事例をあげ、授名については、東坊城(菅原)和長の『和長卿記』から検討し、若狭国畑田氏、近江国青地氏・矢嶋氏・林氏の事例から検討し、さらに在俗信仰者の結衆の近世的変容について詳述した。若狭国、近江国の武家の一休派への結衆を明確にしたのは、本論文が最初である。

第3章では、尼・女性信者の結衆について論述している。本来、尼・女性信者の結衆は大徳寺派に多く見られるが、学術的に批判されることもあった。しかし、教団の結衆にとってプラス要素もあることから、大徳寺派の尼について記した『自戒集』と一休派の祖師忌法会を論題に、尼・女性信者の教団結衆と史的展開をたどった。

第4章では、泉南仏国について論述した。室町時代に社会経済的に著しい発展を遂げた中世都市堺は一休派とは深いつながりがあり、本章では一休派を室町時代に都市堺で教線を拡大した禅、念仏、日蓮法華の三つの勢力のひとつとして位置づけた。

中世都市堺で仏法が繁栄していた事を指す言葉として多用される「泉南仏国」の語義の検討、諸宗派の堺への進出の問題、堺環濠都市遺跡での寺院遺構の問題、近世の堺寺町の成立と史的展開に関して論述した。『堺市史』編集以来、事実の指摘にとどまっていた泉南仏国についての新解釈を提示し、『堺市史』続編の編集当時の研究者たちの賛同を得た。

付論では、酬恩庵蔵「堺南北庄大徳寺奉加引付」の史料紹介と研究を通じて、堺南北両荘の豪商たちが応仁文明の乱で荒廃した大徳寺の復興事業に結衆していた事実をあげるとともに、貿易商人として著名な湯川氏一族の結衆があったことを指摘した。なかでも堺海会寺の季弘大叔と親交が深く『蔗軒日録』に頻出する堺北庄の禅本居士が一休派に結衆していた事実を知ることができたのは、特筆す

べきことである。従来、『堺市史』は尾和宗臨と淡路屋寿源のみが私財を提供して大徳寺を復興したかのように述べているが、広範な堺商人たちの結衆があったことを明らかにした。

終では結論として、第1・2部各章の成果をもとに、一休派の結衆の史的展開が禅宗の歴史のなかで、どのような意義を有したかを同じ大徳寺派の沢庵宗彭(1573~1644)の遺言を考察することで明らかにした。沢庵は一休と同様に後継者を否定しており、その意向は貫徹された。大徳寺復興という使命が、一休に強くのしかかり、一休没後も一休派は、その使命を継続していく。沢庵の場合は、江月宗玩たちが大徳寺の運営をしており、一休と一休派が背負ったような使命はなかった。それゆえ沢庵の遺志通りに、沢庵の後継者は生まれなかった。このような沢庵の事例を提示したことは、本論文の新発見である。

本論文によって中世寺院史研究において、初めて一休派の事例が明らかになった。また結衆という寺院史研究の新しい主題を提示しえたことも本論文の成果である。一休派に関する公刊、未公刊の史料を博搜して立論したことで、本論文は今後の一休・一休派を研究する場合の基本文献となりえた。

本論文の問題意識・研究視角・方法論を用いて、忘却された他の寺院・仏教教団・社会集団についても研究していくことが望まれる。中世堺の時宗・日蓮法華宗などについては、本論文の主旨に従って研究の見直しがなされることが望まれる。その第一歩として本論文が活用されることを願う。